

よみもの 歴史上有名人と脳卒中

山内容堂と脳卒中

古谷博和(FURUYA Hirokazu)^(2,3)、北岡裕章(KITAOKA Hiroaki)⁽¹⁾
高知大学医学部 老年病・循環器⁽¹⁾・神経内科学⁽²⁾
高知大学医学部 SCU センター長⁽³⁾

山内容堂(ようどう) (1827 - 1872)、は幕末の第 15 代土佐藩主で、諱(いみな)は豊信(とよしげ)。幕末の四賢候の一人として評価され、幕府方(佐幕派)からも尊王攘夷派からも期待される一方、酒と女と漢詩を愛し、みずから「鯨海酔侯(げいかいすいこう)」と称し、趣味人としての人生も貫いた人物といえ、その一見自由奔放にも見える生涯は、歴史小説の題材として取りあげられることも多い^(1,2)。

藩主就任から大政奉還まで⁽³⁻⁵⁾

容堂は文政 10 年(1827 年)生まれで、生家である山内南家は分家 5 家の中では序列が一番下であった。そのため、通常藩主の子は江戸屋敷で育つが、容堂は高知城下で生まれ育っており、この点幕末の薩摩藩を実質的に運営した島津久光とやや似たところがある。13 代、14 代の藩主が相次いで急死し、14 代の藩主の子供があまりに幼かったために、13 代当主の妻の実家にあたる島津家の島津斉彬が老中阿部正弘に働きかけ、分家で当時 22 歳の容堂が嘉永元年(1848 年)に藩主に就任した。

藩主になってから容堂は、門閥、旧臣による藩政を嫌い、吉田東洋を登用し、西洋軍備採用、海防強化、藩士長崎遊学、身分制度改革、文武官設立などの藩政改革を次々と断行し、土佐藩の財政立て直しも進めた。吉田東洋は後に藩の重鎮となる、後藤象二郎、福岡孝弟、岩崎弥太郎らを発掘、登用している。

容堂は他の四賢候(福井藩主 松平春嶽、宇和島藩主 伊達宗城、薩摩藩主 島津斉彬)や水戸藩の徳川斉昭らと交流を持ち、阿部正弘に幕藩体制の改革を訴えたが、阿倍の死後大老職に就いた井伊直弼と将軍職後継問題で対立し、一橋慶喜(徳川慶喜)を推していた四賢候らのグループには、安政の大獄の際には謹慎処分を受けることになり、容堂は隠居した。謹慎中に土佐藩では武市瑞山(半平太)を中心とする土佐勤皇党が勢力を増し、尊皇攘夷活動を積極的に行うとともに、対立した吉田東洋を暗殺する事態に到ったため、容堂は門閥家老らと手を結び再度藩政を掌握した。

文久 3 年(1863 年)8 月 18 日、京都で会津藩と薩摩藩による長州藩追い落としのための朝廷軍事クーデター(八月十八日の政変)が起こり、佐幕派が有利になったため、容堂も謹慎を解かれ土佐に帰国し、隠居の身ながら藩政に関与し続けることになった。この時容堂は土佐勤皇党の弾圧を徹底的に行い、武市瑞山をはじめとする殆どの幹部に死を命じたが、この事が後々容堂の評価にも大きな影響を与える事になった。この年に容堂は朝廷から参与に任じられ、参与会議に参加するが、彼自身

は病と称して欠席する事が殆どであった。

その後、脱藩していた土佐藩脱藩浪人の坂本龍馬や中岡慎太郎などの志士たちの仲介で慶応2年(1866年)に薩長同盟が成立し、これにより世の趨勢は倒幕に大きく傾くことになる。慶応3年(1867年)5月、薩摩藩主導で設置された四侯会議(容堂と松平春嶽、伊達宗城の他には島津久光が参加)に参加するが、反幕府的な動きをする薩摩藩の主導に嫌気がさし、容堂は欠席を続けた。しかしこの時期、薩摩藩の小松帯刀、土佐藩脱藩浪人中岡慎太郎の仲介で、薩摩藩と乾退助(板垣退助)、谷干城との間に倒幕に関する薩土密約が結ばれ、容堂は内々にこれを許可している。しかし容堂自身は自分を藩主に推薦してくれた幕府に対する恩義を捨てきれず、武力倒幕にためらいがあったようだ。この時坂本龍馬は、幕府が委託されている政権を朝廷に返還して、議会の設立などを行うという「船中八策」を後藤象二郎に伝え、後藤はこれを容堂に進言した。これを良策と考えた容堂は、老中板倉勝静らを通じて15代将軍徳川慶喜に建白し、慶喜はこれに従って慶応3年(1867年)10月14日に大政奉還が行われ、土佐藩は以後明治維新の主導権を握る「薩長土肥」四藩の1つとなった。

このように容堂の行動は外から見ると佐幕と尊皇の間を揺れ動いているように見えるうえに、本人が飲酒や仮病のために頻繁に気に染まない重要会議を欠席したため、「酔えば勤皇、覚めれば佐幕」と当時の志士たちから揶揄されることになった。

明治維新後の容堂と脳血管障害⁽⁶⁾

容堂は明治維新後、内国事務総裁(現在の総理大臣に近い職と考えられる)などに就任したが、思想的には身分制を肯定していたため、かつての家臣や平民など身分の低い者が政府高官として勤務していることに馴染むことが出来ず、明治2年(1869年)に官職を全て辞職。新たに東京箱崎の元・田安德川別邸を買収して、今度こそ本当の隠居をする事になった。

しかし、容堂はここでおとなしく暮らすことなどはせず、当時別荘地として知られた橋場(東京都台東区)の別邸である綾瀬草堂で妾を十数人も囲い、酒と女と漢詩や書画骨董に明け暮れる豪華な晩年を送ったという。また連日両国、柳橋などで豪遊し、家産が傾きかけるほどであったとも伝わっている。ただ、容堂は昼は読書と詩作、夜は饗宴という区切りのある生活を送っていたようだ。

明治4年(1871年)は廃藩置県が行われた重要な年だが、容堂はこの布告が行われた7月頃には、長々と箱根観光を行っている。翌明治5年(1872年)、旧暦1月28日の夕方、入浴後突然容堂は病を發し、厠で人事不省に陥った。この時、司馬凌海や土佐出身の弘田玄又(げんゆう)を含む侍医団が記した「御容体日記」によれば、夕方5時頃、めまいを發症してしばらく意識もうろうとした後に、左半身麻痺、構音障害、流涎を認め、右頭部の頭痛が甚だしく、嘔吐もあったとのことである。翌29日の朝からドイツ人医師ホフマンが治療にあたるようになったが、病状は一進一退で、2月12日には一時危篤状態に陥ったらしい。またこの際、肝機能障害も指摘されている。3月に入ってから、ホフマンは自ら開発し移入されたばかりのエレクトル療法(詳細不明)を行ったが、これにより容堂の感覚や運動機能は日を追って改善し、この年の

春には快気祝いの宴を催すほどであった。しかし 5 月にまた軽い卒中発作があり、6 月 10 日頃再度発症した脳卒中発作のために同月 21 日、数え年 46 歳で逝去した。

容堂の脳血管障害が何であったかは正確にはわからないが、記録された臨床症状からは、軽症のくも膜下出血や、脳底動脈解離、脳室内穿破した右大脳半球実質内脳出血などが考えられる。脳梗塞の血管再開通等は、症状の改善までに 3 ヶ月以上かかっているため可能性は少なく、くも膜下出血や、動脈解離の方が考えやすい。容堂は長年の飲酒癖で肝機能障害や動脈硬化などをきたしていた可能性があり、動脈解離や動脈瘤があったことも充分考えられる。ほぼ半年後に起こった発作の再発は、脳動脈瘤の再破裂だったと考えると矛盾は少ない。彼の墓は土佐藩下屋敷があった大井公園（品川区東大井 4 丁目）にある。

おわりに

現在まで残されている容堂の風貌を見ると、一見豪放磊落な行動パターンとは逆に、ひ弱な文学青年のようにも見える(図 1)。彼と似た経歴の島津久光もそうであったが、地方育ちで中央の有力者との間につながりが無いというコンプレックスを打ち払うために、彼が漢学を含む勉学に励み、無意識のうちに度量を大きく見せるように振る舞っていたと考えることもできる。度量の大きな人間は飲酒量も生半可ではないという土佐の土地柄や、彼のもともとの性格のために、飲酒に走らざるをえず、46 歳という当時としてもそれほど高齢というほどでもない年齢で死に到ったと考えると、幕末から明治維新という激動の時代に翻弄された彼の人生の別の面も見えてきて興味深い。

参考文献

1. 司馬遼太郎. 「竜馬が行く」、文春文庫
2. 司馬遼太郎. 「酔って候」、文春文庫
3. 平尾道雄. 「図説土佐の歴史」、初版、講談社、1982, p112-114.
4. 野澤伸平. 新版 高知県の歴史散歩、山川出版社、1989, p18-21.
5. 荻慎一郎, 森公章, 市村高男 他. 高知県の歴史、山川出版社、2001, p272-275
6. 吉村淑甫. 「鯨海酔候 山内容堂」初版、新潮社、1991、p233-253



図 1. 晩年の山内容堂^③